

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認可雜誌) 第三五二号
 昭和四十七年十月二十五日印刷 昭和四十七年十一月一日發行

第三十八卷

第十一号



1972

11



—目 次—

表紙 「西行法師」松涛達文画

静かなるブームに思う……………	鶴 飼 隆 玄…………	(2)
私の『本棚』……………	室田正道・渋谷賢応・芹川博道…………	(5)
法然上人の世界(二) 一枚起請文にみちびかれて……………	梶 村 昇…………	(10)
法兄野口周善師の靈に捧ぐ……………	太 田 邦 雄…………	(14)
座談会 道を求めて一大正大学女子修禪道場に参加して……………		(17)
悲しみをのりこえて……………	山 内 き め…………	(21)
新刊紹介 戸川靈俊著『若き日の軌跡』……………		(22)
異僧真覚〈第十一回〉……………	柴 田 六五郎…………	(24)
「道」小松谷への道……………	高 橋 良 和…………	(28)
聖典解説 浄土宗の陀羅尼(だらに)……………	真 野 竜 海…………	(30)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて……………		(33)

語和声念



老人問題に取り組んだ小説、有吉佐和子の「恍惚の人」がベスト・セラーとなり、マスコミの話題となっている。公衆衛生の向上等による死亡率の減少で日本人の平均寿命は男七十歳、女七十五歳に延び北欧の最長寿国の仲間入りをした。現在全人口に占める六十五歳以上の老人の割り合いが七%だが、昭和七十年には英仏と同じ一二%に達し高齢社会になる。現在六十五歳以上のひとり暮らしの老人は全国で四十八万人、うち三七%は病弱である。また寝たきり老人は全国で三十四万人おり、そのうち着替え、食事等に人手を借りなければならぬ人が十五万人もいる。

ところでこうした老人の看護に当れる老人家庭奉仕員（ホームヘルパー）は六千五百人で、老人千二百人に一人という割り合いである。一方老人ホームは千二百七十（定員九万二千人）で、このうち寝たきり老人を収容する特別養護老人ホームは二百七十（定員二万人）しかない。「恍惚の人」の立花茂吉の場合は、妻が倒れて死んでいるのも判らない老人性痴呆である。老人性精神病で幻覚に悩まされるが、妻に先立たれたのち息子の嫁昭子と孫の敏等に世話して貰えただけ幸である。総理府の発表した老人対策のモニター報告によると、六十歳以上の老人のうち、家族と同居希望が六五%、別居希望が三〇%となっている。この老人問題は核家族化の影響と住宅問題に根ざしている。老人用住宅と子供夫婦用住宅の配置などによって、老人の家族と同居したい希望を果たすことは可能であると思われる。また老人と同居し扶養する人の所得控除を考へることも必要であろう。「恍惚の人」では人生の延長線として老人問題を考へているが、本来は父母恩重経に説かれているように、現在このように生活出来るのは父母の生育によること、父母の恩の深重なること等、経の本質を心得れば、扶養能力がありながら、老人を有料老人ホームに追いやるような状態が出てくることは少くなるはずである。

（佐藤行信）



静かなるブームに思う

総本山知恩院執事長 鵜飼 隆 玄

歴史の変革は文化の向上に比例して、時間的にも空間的にも短縮化して来るといわれます。古い時代には百年も変化なく続けられたことが、近代では三年か五年で、大変革が続出するともいわれています。このために一般人は、社会の変化に追従することができず、知らず知らずの間に脱落して、孤立化して行くようであります。人間は元来「孤」の生活ができないもので、連帯的共同生活をしなければ安定しないものであります。この事は説明するまでもなく歴史が証明し、現実が物語っています。

しかしその反面、原始的な共同生活から文化の向上にスライドして、逆に孤立化してい

く傾向が強いものであります。この理由は無知な利己主義から起って来る誤りであると思ふのであります。こういう心の動きを仏教では、三毒煩惱の生であると教えています。何か三毒煩惱などというと、古い世迷い事のように感ずる人が多いのではないかと思ひますが、一步退つてよく考えてみると、これ程貴く正しい導きは、他に何ものも及ぶ事のできない教えであると信じます。その三毒とは次の三つであります。

痴 眞実を知らないおろかさ

瞋 いかるべきでないいかりに燃える誤り

貪 求むべきでない無限の欲望をおさえない

生活姿勢はいつでも誰でも持ち易いものであります。

この姿勢は個人の生活から始まって、公的連帯社会に於ても、事業面に到るまで浸透して行くものであります。

このために起る対立、抗争、混乱等によってお互いに悩まされ、苦しめられているのではないでしようか？

こういう生活の中からは、人間の平和も幸せも湧き出ては来ないものであります。人々は昔から富を求めて營々と働き続けて来たのであります。人が働くのは富即ち金を求め、それによって豊かな「物」を得ることが目的であったのです。「金持ちになる」「物持ちになる」という事は、今日までの人間の夢であり、理想であったと思います。

このために人々は悪業を重ね、人を陥れ、苦しめることすら顧りみなかった程であります。この何千年の永い人間の夢が実現して来たのが、現代日本の生活ではないでしようか。戦前、戦時から戦後の混乱時代には、夢

にも考える事ができなかった、人間の自由と物の豊かな生活が、経済的な高度成長の陰から生まれ出て来たのであります。

では恐らく史上最高の物の豊かな今日この頃の私達に、果して幸せがあるでしようか。何千年の歴史を通じて求め続けて来た生活が現実となつて、当然幸せも訪れる筈であり、その幸せがないとすれば、何かの狂いが何処かにあったといわねばなりません。

それでは何が、何処で狂つて来たのか。

人間生活の原点は共同生活であるとはいへ、その向上に逆比例して分裂化し、孤立化する傾向があることを考えなければならぬと思う時、ここに問題点、今日の悩みがあると思います。

しかし近代生活のこの悩みは、孤立化した人が職場、事業等の面に於て当面の問題のため、団結し組織化する事によって、幾分の安定を求め得たのでありますが、さてその当面の問題が充足されて生活が満ち足りてきて、個人には依然として安定した幸せは訪れ

ては来なかったのであります。

それを裏づけするように、今日この頃、仏教信仰を求める静かなブームが起っているようです。通俗的な仏教解説書や物語りがベスト・セラーの読物となったり、カセット、テープ、レコード等の分野にまで、仏教的な資料が充満してまいりました。

これこそ豊かな生活の中にも、人間が幸せを見出せず、孤立感にたえきれず、安定を求める、やるせない心の投影ではないかと思えます。

それでは、これ等の読書や聞法で、果して信仰を獲て、人々が安定生活に入れたでしょうか。余程の優れた人を除いては、一時的心安め以上は不可能ではないかと思えます。

読書、聞法は入門であって信仰ではないのです。法然上人の一枚起請文の中に、

例え一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無知のともがらに同して智者のふるま心をせずして、ただ一向にねん仏すべし

とありますように、信仰というものは耳や目から得るものでなく「身体」で味い、体得するものでなければなりません。

したがって信あって行動し、その体験を記録し、発表されたものが文書であり、教えでありますことを考えても、行動の実践を欠いては信仰を得られず、求めたものを得ることができないことは、法然上人の御言葉で明らかであります。

これを使い、今日の静かなブームを考えた時、耳・目で知ったものを身体にし込ませることが大切であります。そして静かなブームが行動的なブームまで進めなければ、心の空しさを満たすことはできず、人間の幸せは得られないと思えます。

なればこそ「信行具足の念仏」を教えられた浄土他力念仏の救いの頼もしさを、今更ながら有難く思うのであります。静かなブームに終ることなく、今日の人々の幸せのために、行動的ブームまで推し進めなければならぬと信じ、且つ希ってやみません。合掌

私の「本棚」

奇僧金谷上人の行状記

宝田正道

(TBSブリタニカ編集局次長)



奇僧という名に価する坊さんは、昔から各宗に沢山いる。しかし、わが浄土宗で真に奇僧中の奇僧と呼ぶにふさわしい人物を探すとすれば、まずこの金谷上人ほど風変りな、傍若無人とも思える僧は見当るまい。宝暦十一年(一七六一)、近江の国、琵琶湖畔の百姓の伴として生れ、天保三年、七十三歳で歿するまで、風来坊のように飄々と日本国中を歩きまわり、はじめに法話や説教をするかと思えば願人坊主や博徒、船頭の仲間入りして漁

色、商売、喧嘩、狩猟、駆落ちなどやりたい放題のことをしてかす。一方、子供ずきで、無邪気に子供衆を舟にのせて大阪から長野へ善光寺参りにつれて行くとか、画にも巧みで宗祖の絵伝を描いて有縁の人々に喜捨するとか、晩年には山伏の仲間に加わって、大峰登山までやってのける、とにかく自由奔放、非僧非俗、底抜けに型破りの行状は、天下一品の奇僧と称するにふさわしい、愉快な坊さんである。

波瀾万丈の気ままな生涯を送った彼の墓は、安政四年山田兵治という人が、「無量院泰誓妙幢金谷法橋位」と刻んだ石碑をつくり、現在近江下笠村の宗栄寺境内に建てられているという。

早生れのせい、か、「早松」と名づけられ、糞溜めに落ちてからは「オソマツ君」ならぬ「クソ松どの」という綽名を貰った（梅檀は二葉より芳し？）が、例のごとく九歳の頃から大阪天満北野村の宗金寺にやられ、いたずらと早熟で手がつけられず十四歳の冬、江戸は増上寺の袋谷文の寮に入れられて、三十人の所化の列に加えてもらった。生来頭はよく、知識欲に燃えていたので、三経一論五部九卷はもとより、八宗兼学のほか、儒教や悉曇の学にまで非凡な俊才ぶりを発揮した。しかし、その自叙によると、前述のような自堕落ぶりで、疥癬を病んだり遊里に出入りしたりで十八歳の春、とうとう江戸を出奔した。これからおもしろいのであるが、あとは読者自らの眼で楽しんでもらいたい。平凡社刊東洋文庫37に入っている横井金谷著・藤森成吉訳『金谷上人行状記』（ある奇僧の半生・350円）という本がそれである。現代語訳だから読みやすい。

わが書架にある数千冊の本の中から、この一冊を選ん

だ理由は三つある。第一は、学問的に金谷上人が諸処で描いた円光大師絵伝（四・六巻）を集めたためで、兵庫経の島の来迎寺、姫路の真光寺、長崎の大音寺、赤穂の大蓮寺、下関の熊谷寺、名古屋の東竜寺などで、金谷上人自筆の絵画が保存されていないか、という照会をかねている。第二には修験道の大峰入り行事について詳細を極めた筆致を、ぜひ賞味してほしいからである。また、第三には、還愚痴をモットーとするわが浄土宗に、こんな破天荒な行状をつづけた「上人」がいて、最も人間味のある生涯を送った史実を、形式ばかりで体裁をつくらうだけが精一杯に見える現代僧たちに爪の垢でも煎じて飲ませたい、と考えたからに他ならない。著者は彼を波瀾万丈の点で、世界的に有名なベンヴェヌート・チエルリニの自叙伝と比較している（解説）が、金谷上人こそ、一口にいえば「俗に徹して俗を出た、東洋的達人（超越者）の面影がある」と評しているのも無理からぬ感想であろう。一読をすすめる所以である。

「国訳一切経」 の 思 い 出

一長野県茅野市心光寺住職一

渋谷 賢 応

昭和十八年の晩秋、私は安居君、前田君（真野竜海）と三人で神田の仏書屋に入っていました。ふと上を見ると本棚から天井一ぱいに、五段に積み上げられた本に大書して、「国訳一切経」金二百四十円と書かれた張り紙が目につきました。私はたまたま本屋のおやじさんの所にとんで行って、

「あれを欲しい、手金はいくらですか」

とたづねました。

「五円です」

「今日は持っていない、明日必ず持ってくるから売ら

ないで欲しい」

と言つて、三人は外に出ました。二三歩すると安居君が、

「お前、ほんとにあれを買うのか」

「うん、出るのを待っていたんだ」

「金はあるのか」

「今は無い、毎日払うんだ」

前田君はびっくりしたような顔で二人の顔を見くらべていました。

○

私は京都仏教専門学校へ入学した時より、ここを出たら東京の大正大学に入りたいとあこがれていました。當時私は西加茂の川内知光さんの西方寺さんにお世話になっていましたが、その後随身を転々としながらも、お金を貯めました。当時大正大学の一年の学費が百二十円程でしたので、三年間に三百六十円あれば学費はまかなえる。後は随身していけば何んとかなる。そう思つて貯めるうちに、目的の金額に達したので師匠に願ひ出て大正大学入学の許可をもらい、芝、天徳寺山内の栄立院にお世話になりました。栄立院では福西禅兆上人（賢兆上人の祖父）に可愛がっていただいて、待遇ももつたない

程よく、京都で貯めこんだ学費が不用となって来ました。あだかも太平洋戦争は益々激烈となり、学校もくり上げ卒業となって来ました。そこで、このお金を「一切経」につき込もうとしていたのです。

私はそれから毎日郵便局通いをはじめました。当時、よその郵便局で積んだお金は、一日に五円しか下せませ



労働・禁欲・布施

淑徳短期大学助教授 芹川博道

んでした。学校から郵便局に行き本屋に行き五冊ずつもって帰りました。半分程そうしたとき、本屋のおやじさんが気の毒がってあとをリヤカーで神田から芝まで運んでくれました。

一生に一度は目を通して死にたい。この願いも生きるであろう年の数と、目を通さない本の数と、あまりの開きに呆然としている今日このごろです。

「時は貨幣であるということを忘れてはいけない。一日の労働でシリングをもうけられる者が、散歩のためだとか、室内で怠情にすごすために半日を費すとすれば、たとえ娯楽のためには6ペンスしか支払わなかったとしても、それだけを勘定に入れるべきではなく、そのほかにもなお5シリングの貨幣を支出、というよりは、抛棄

したのだということを考えねばならない」。これは、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に引用されたベンジャミン・フランクリンの言葉であります。はじめてこの書を読んだとき、難解な内容の中にあって、この言葉だけはよく印象に残っていたことを思い出します。ウェーバーは、いうまで

もなく、19・20世紀のドイツ社会学の碩学であります
が、本書の主題であります「資本主義の精神」を古典的
といえるまでに純粹に包含したものととして、フランク
リンの言葉をとりあげてゐるのです。

「資本主義の精神」といいますのは、利潤の追求（金
もうけ）が一つの自己目的となつていて、何のためとい
うのではなく、ただ貨幣のために貨幣を追求する。しか
もそれが倫理的にみて善いことと考えられ、日常生活を
専らその目的のために合理化し組織するといった精神の
ことです。

ウェーバーが本書でとりあげようとしているのは、宗
教と経済の関連性の問題で、とくに、近代資本主義の台
頭期における宗教の社会的機能をとりあつたといつてい
えます。もちろん、主題のように、近代資本主義の精
神の誕生という歴史的一段階に、プロテスタンティズム
の倫理が重要な役割を演じたことをいっています。そし
て、その倫理を、使命としての職業観と徹底した世欲内
の禁欲倫理に求めています。最後にウェーバーは、ジョ
ン・ウェスリーの言葉を引用して、本書の主旨との同一
性を主張しています。

「私はきづかっているのだが、富の増加したところで

は、それに比例して宗教の実質が減少しているように思
う。……宗教は必然的に勤労と節約を生むほかなく、こ
の二つは富をもたらしほかはない。しかし、富が増すと
ともに、高慢、激情、そしてあらゆる形で現世への愛
着も増してくる。……純粹な宗教のこうした絶えまない
腐朽を防ぎうる途はないものだろうか。人々が勤勉であ
り、質素であるのを妨げるべきではない。われわれは……
……できるかぎり利得するとともにすすめるかぎり節約す
ること、すなわち、結果において富裕になることを勧め
ねばならない」。また、「できるかぎり他に与え」なくて
はならない、と。

仏教も、古くから、勤勉や禁欲を勧め、布施を賛美す
る倫理は經典が数多く伝えていますが、歴史的にみて、
社会・経済的役割を与えているかという社会科学的研究
は、本書の影響下にあるいくつかのものを除いて、がい
して今後の課題といつてよいと思います。現代の「豊か
な社会」の中で、労働時間の短縮、余暇の増大、大量販
売、大量消費が進行し、反面、社会福祉は遅々としてい
る社会において、今日こそ、労働の意味を考え、禁欲を
勧め、布施の社会的役割を強調する仏教倫理を、求めて
やまないのです。



法然上人の世界(二)

——一枚起請文にみちびかれて——

亜細亜大学教授 梶村 昇

たゞ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたかひなく、往生するそとおもひとて、申すほかに別の子細候はす。たゞし三心四修なんと申す事の候は、みな決定して、南無阿弥陀仏にて往生するそとおもふうちにこもり候なり。

一枚起請文の願目は、ここに記された「往生極楽のためには」ということである。上人が生涯の課題とされた「速かに生死を離れん」ということは、この「往生極楽」ということで決定したのである。それはわれわれのいう悟りとか救いということの内実である。

ところで、「往生極楽」とはどういうことであらうか。学者は随分むずかしいことを述べるけれども、上人にと

っては、そのような意味あいではなく、文字通り「極めて楽しいところへ往って生まれる」ということであつたことと思われる。しかし、この「極めて楽しいところ」ということが、分つたやうで分らないことである。一般には「極楽に生れる」という言葉で、何か分つたやうな気分にならされて、何となく過ぎてしまふのであるが、さて振り返ってみると、どういふことなのか分らない。実際には、振り返って考えるといふことが、すでに上人の道からはずれているのであらうが、キリスト教的にいえば、すでに智慧の木の実を食べてしまったものにとつては、それが躓きの石となつて、このわかつたやうでわからない極楽という言葉を、何とか分らうとする。ある

禪宗の碩学などは、これは一種の公案であるから、この公案を解かねばならないというように禪的に理解をしている。しかし、それでは上人が捨離した聖道門に逆もどりしてしまふ。公案が解けて大悟徹底できるくらいなら、何も上人は苦しまなかつたはずである。そこで、この蹟きの石を越える浄土教的方法がなければならぬ。

その第一点は、宗教における悟りとか、救いということとを、身近なものとして受け取らなければならないということである。宗教者はそれをあまりにも高遠なもののように説き過ぎてゐる。そして世人もそれを受けて、悟りや救いの世界を神秘的な何ものかのように考え夢みがちになる。私はこれが第一の誤りではないかと思う。確かに完結された悟りや救いは稀有の存在である。むしろそれは現世において獲得することは不可能であるといふべきであらう。上人も

いけば念仏の功つもあり、しならば浄土へまいりなん。とてもかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば死生ともにわづらひなし

と、つねに仰せられていたという。完結された救い、それは上人にとっては極楽浄土に往生して得られるものであり、それは死んで後に得られるものであったのだ。

「十惡の凡夫」とみずからいわれた上人が、この現世において、完結された救いに到達できると考えられたはずはない。救いというものをあまりにも高遠な、それ故に、完全無欠のものとして夢みること自体が、すでに現実には実現不可能な觀念の遊戲に過ぎないことを知るべきである。

とすれば、現世における救いとはどのようなものであらうか。それが第二の点となる。これを考えるに當つて、私は常に上人の基本的立場というものに思い至る。それは前回にも述べたように、「觀念の念にもあらず、又學問して念の心をさとり」て考えるようなものではないということである。すなわち、概念的、思弁的認識作用によつて知った知的理解によるものではなく、現に思想し、憶念し、行動しつつある日々の生活そのものの中に體驗し得るものでなければならないということである。

そこで、一転して、現実のわれわれの生活そのものをふりかえつてみよう。そこにはまことにくだらない、そして苦しみの多い人生が横たわっている。しかし、その生活の中においても、時には喜びもある。その喜びは少くとも苦の人生に耐えぬく力となっていることはお互いに體驗する事実であらう。とすれば、少くともこの喜び

こそ、事実として、現実の救いの姿ではないか。

しかし、その喜びも泡沫のような喜びから、永遠に消えることのない喜びまで、千差万別である。「人間万事塞翁が馬」といわれるように、人生の幸不幸は予測できるものではない。そこに宗教が「永遠なるものとの関わり」において喜びを味あおうとする意味がある。

すると「永遠なるもの」とは何か、という疑問が生まれる。それを解こうとして哲学的に論ずれば、それはまた「観念の念」となる。上人はそれを阿弥陀仏といわれた。無量寿・無量光などと字義の分析をしないのである。分析をすれば、それは概念的・思弁的認識になりさがってしまふ。上人は阿弥陀仏を、永劫の間修行し、その因に報われた血の通った報身仏として崇められた。

上人にとっては、阿弥陀仏につながる喜びこそ、現実における生きる力であり、救いであつたのである。そこにこそいのちを感じられたのである。「念仏とはその感動の声である」と先輩は示してくれた。「いけば念仏の功つもり」とは感動の生活が連続するということである。

私はそれを再び現実の生活に当てはめてみたい。上人における感動の生活とは具体的に何であつたかというこ

とを。それは日常の生活において、同信の人々とともに、阿弥陀仏を仰いだことにあつたと推察する。一人で弥陀を仰ぐということよりも、友と共に仰ぐことの方が喜びも倍増することは体験的事実である。否、友の心が永遠なるものにつながる、すなわち、自分の心にもつながるということが、どれほどの喜びであるかは、体験したものだけが知る喜びである。

私はそこで「法然上人をめぐる人々」すなわち同信の世界こそ、現世における浄土であつたと思うのである。例えば九条兼実の場合であるが、学者は兼実の信仰は雑信仰であり、戒律など尊んでいたから、専修念仏者とはいえないなどと分析している。しかし、兼実が法然上人の配流に当り「法然が事などなげきて、久しく病にねて起居も心になは」(『愚管抄』巻六)ぬありさまであつたといわれるし、その間にも、藤中納言光親を召して「(法然上人の)謫所へうつられぬる事、いきて世にある甲斐なきに似たり。……今生のうらみこの事にあり。」とかきくどき仰せられたという。事の細かい分析は、むしろ角をためて牛を殺すに似ている。兼実がいかに上人を心の師としていたかは、これら一、二の文献によっても徴することができる。まさしく上人と兼実との世界は

宗教的世界であつたといふことができるであらう。一枚起請文には、

三心四修なんと申す事の候は、みな決定して、南無阿弥陀仏にて往生するそとおもふうちにこもり候なり。

とある。これを上人と兼実との關係に解すれば、兼実が雑信仰であつたとか、専修念仏者でなかつたとかいふことは、みな法然上人を心の師と仰いでいた兼実の心のうちに統攝されてしまつていたといふことであらう。一枚起請文のこの一節は、学者たちがすぐ三心だとか四修だとかいふことに對して、自分の真意を理解されないことに對する上人の歎きの言葉のように受け取られる。

兼実を初めとして、熊谷、津戸、蓮生また阿波介に至るまで、ともに永遠の生命である阿弥陀仏を仰ぎ、念仏を称えていったところに救いの内実があつたといえる。それはおさまりかえつた悟りでも救いでもなく、苦惱濁亂の人生を生きる力となつたといふことであらう。

法然上人のみ教を今に生かすならば、われわれが共に永遠なるものを見つめて、日々に生きているといふいのちを感じる生活を、手を取りあつてはげましあつていくことにあつてであらう。

(次号へ)

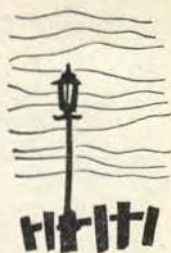
〔西行法師〕

今回はいままでと趣を異にし、人物紹介である。

平安末期から鎌倉初期(元承一―建久一・一一一八―九〇)にかけての歌人西行は、その生涯を旅と歌に生きたことであまりにも有名である。

西行は藤原秀衡九世の孫として出生し、俗名を佐藤義清(のりきよ)といい、鳥羽上皇の北面の武士として仕え、左兵衛尉となつた。しかし、二十三才にして思うところあり出家、妻子からも離れ、以後、吉野・伊勢をはじめ、四国・九州・奥羽にまで及ぶ諸国行脚の中に生涯を送り、晩年は京都洛東の雙林寺に庵をかまえたが、河内国弘川寺において波乱にとんだ生涯をとじたといわれている。

「新古今集」の代表的歌人の一人でもある西行の作風は、この生活態度がにじみ出たものとして、本来の仏道修行からの影響も少なくないが、直情直感ともいふべきはげしい面があふれており、その特長としての人間臭さの強い作風は、後世に大きな影響(宗祇・芭蕉等)を与えている。なお歌集として「山家集」がある。



法兄野口周善師の靈に捧ぐ

健策校長「私学経営者の半生」を讀みて

浄土宗ハワイ開教使 太田邦雄

本誌五月号に掲載された文中に、「先代野口周善先生の創立になる明照学園樹徳高等学校」とあるので、昔を偲び一文を綴って、周善法兄の靈に我が意を捧げたいと思います。私がハワイ開教使に任命されたのは、大正七年三月で、法兄が前住の大善寺から師籍の桐生浄運寺に転じ、その後住として大善寺を継承してから六年後でありました。

顧るに、法兄が浄運寺本堂の一隅を利用して明照幼稚園を創設した時に、私の妻が保母として奉仕し発足したのでした。而して其の当時各宗の経営であつた樹徳裁縫学校が後に、浄運寺の地内に移され、法兄の経営となつたことを聞きましたが、現在の明照学園樹

徳高等学校として職員八〇名、生徒数約一七〇〇名を収容するまでに発展されたことは、法兄の三男健策校長の滅私奉公と献身的な経営に依ることながら、尚関係者の方々が御仏の教に徹して居られたことであると遙かに敬意を表しております。

法兄は大善寺住職中に本堂を改築し、未だ落成に至らずして師籍に転じたので、私がその後を受け継いで完成にまで運び、尚庫裡と本堂の間に吞竜堂を新設して、落慶法要を済ませた後に、私はハワイ開教を志望したのです。その旨を話した処、法兄は「行け、自分も希望は持っていたが師僧の死で果せなくなつたのだ。後は俺が引き受ける」とし、後の

整理万端に當ってくれたのでした。私は結婚後五年で、友人は「冒険だ」と言いました。が、自分としては、「運は天に任すべきではなく、自ら開拓すべきものだ。我には御仏の加護がある。中途死しても悔はない。命は永遠に生かざるものである。そこに開教の意義がある」と考え、妻に意を質したところ「共にいきます」と言うので、開教の苦闘を覚悟しながら、三歳と一歳の幼児を伴なって渡布したのです。

時は大正七年九月恰も日独戦争中で、独潜航艇ガイヤー号がホノルル港内で武装を解除された頃であったのです。私共の乗船したコレア丸は横浜港から軍艦浅間の護衛によって航海を続け入港したのでした。時の開教監督は久家慈光師で清水親碩、佐山学順、立川真教、吉田良雄等の先輩諸師に伍して布教したのです。当時は開教の初期に属しておりまして、晨朝と夕刻とに授業する日本語の教育を終り、薄暮から乗馬して労働者館府を訪ねて布教し、深夜帰宅するという文字通りの

開教でありました。

斯くして大正十年、法兄が宗務所の財務部長であった頃と思いますが、長谷川良信師と共に世界宗教視察の途次、当地を訪ねて視察されましたが、爾来二十年を経て、昭和十六年の日米開戦と同時に私は敵国人指導者として軍部に牽引され米大陸を転々とし護送せられること二十二年を経過し、後の二十二年は妻子と共に収容されて、四ケ年間鉄柵生活の苦闘を重ねました。然し、法弟牧野真達が私の後を追うて海外に布教と教育を志し、開戦の犠牲となりサイパン島で玉碎したことを聞くに及んで、自分が恵まれていたことを知り、御仏に感謝を捧げた次第でありました。

昭和二十年終戦となり、釈放後は再びハワイに帰り、戦時中軍部に徴用されて無住となっていた開教本部ホノルル別院の再興に当たり、先輩名護忍亮師を主班として白鳥舜成師と共に奉じて、その後昭和二十八年は別院を辞して訪日し、総本山に参拝して岸門主貌下に謁見し、現状報告を申し上げ、祖廟に類い

てハワイ埋骨を誓って帰布して以来、別院の囑託として奉仕しつつ現在に到っております

法兄の長男は夭折し、二男善雄師は浄運寺を継承、三男健策校長は大善寺住職として寺門経営しながら亡父の遺志を継いで学校の経営に当り、悪戦苦闘の結果今日の隆盛を得たことは前述しましたが、私は一昨年妻を同伴して訪日の際に、在東京の二男（大善寺で生まれ一歳で渡布した）の運転で、偶々大善寺を訪問したところ、私の住職当時よりも町内共に発展して、墓地の整理は完成し、駐車場の設備工事中でありました。

時に住職夫妻は不在でしたが、その現状を視て夫妻の努力を偲び、御本尊を礼拝し報恩謝徳して辞しました。私も法兄の意を帯して開教五十五年を過し、妻も開教助員として責務を果しながら、結婚後六十年となり七児の教育を完了しました。

私は開教の功績を認められて、昭和三十七年に正僧正に叙せられ、昭和四十三年のハワイ移民百年祭には、天皇陛下より「勲六等に

叙し瑞宝章を授与する」との叙勲に与り、光榮至極と感銘いたしております。尚昭和四十四年には、岸門主親下より寿杖を賜りました。法兄も必ず慶んで下さると思います。

これ実に御仏の御加護であり、法兄をはじめ先輩諸師の御誘導であると感謝念仏し、莊嚴浄土を祈念して合掌するのみであります。私共夫妻は前後三回の訪日で、総本山門跡祖廟に参拝し、両親の墓も整備し、東南アジアまでも歴遊して、思い残すこともありません。渡布の際、「冒險だ」と止めた友も遷化し、法の兄弟も逝き独り遺された自分、「昨日と過ぎ今日と終りて明日も亦、生かざる命おろそかにせじと、御仏の光摂の裡に八十五歳の寿命を生かされましたが、

生かされし命終りて南無阿弥陀仏

無量寿覺に摂かれて往く

と浄土の再会を約束しまして、謹しんでこの文を法兄の靈に捧げます。

無上心院最蓮社勝譽上人誠阿福田周善大和尚莊嚴浄土 称念合掌 心譽邦雄



道を求めて

—大正大学女子修練道場に参加して—

仏教の道を求めるためには、教理的理解も必要であるが、そのもととなるのは、やはり実践体験が一番であろう。そこには理屈をぬきにした、自分の身体が得たものがあるからである。大正大学の女子実践仏教も今年で三回目を迎えた。九月三日から総本山知恩院と比叡山黒谷青竜寺でのわずか三泊四日の実践行ではあったが、その得たものはすこぶる大きいようだ。そこで、その実践仏教に参加した学生に、その感想、また女性からみた仏教など、素直に語り合っていただいた。

—まず、それぞれ実践仏教に参加した感想を—

中川 今回で三回目ですが、夏休み最後の四日間を充実したものにしたいと考え、参加しました。いつも終りました後は、ことばではうまくいえませんが、物事に対する感じ方が

何か違うように思え、新鮮な生活を送れるような気がいたします。

深井 私は二回目ですが、やはり夏休みのしめくくりとして、それも京都で行なわれることが大変魅力ですね。そして仏教大学に学ぶものとして、少しでもまの仏教に触れたいという気持ちも充分にありました。

浅野 私も二回目ですが、最初の時は学校から手紙をもらったので、ただ漠然と何の期待もなく参加しました。しかしそのわりには得たものが大変大きく、ふだんの生活では考えられないような体験でしたので、今回も参加しました。今回は前回にもましての期待をもって行きましたが、なれのようなものがあり、一回目のような感激は得られませんでした。そして何か矛盾めいたようなものさえ感じとられたことも事実です。



—知恩院古経堂にて—

——今矛盾らしいものがあったといわれましたが、信仰生活にはなれないと思います——

浅野 信仰ということになりますとよく分りませんが、一回目の時はすべてが初めての体験であり、何もかもが珍らしくとれましたし、今まで見出し得なかった自分の一面にも気づくことができました。そうしてこうした体験を実生活の中に生かそうとしてきました。しかし、それ程までに仏教は良い教えであり、実践すれば豊かな生活が共に得られるといわれたにもかかわらず、実際には私一人の力ではどうにもならないことが分り、怒りに似たものがありました。今回でそういう気持ちが改めたのです。

——今のご意見には耳を傾けるものが多くあります。たしかに現実の生活と理想の生活の間には、大きな隔りがあり、矛盾だらけともいえます。他の方は今のご意見をどのように聞かれましたか——

深井 私たちは仏教を表面的にしかみる事ができません。四日間の実践をしたとしてもそのほんの一部に触れ、知るしかないのです。このかすかな体験から考えても、現実の生活を見る時、ある種の恐怖感があり、このような生活をしていて良いのかと考えることもあります。しかし仕方ないといえればそれまでですが、私たちはこの現実の生活の中に生きつづ

けなければなりませんし、この矛盾をどのように解決すればよいのか、全く解りません。

——仏教は哲学と信仰の二面をもち合せています。もとより仏教は日本に伝えられて以来、人びとの生活と共に歩んできたのですが、その伝えられた多くのものの中、人びとの親しみやすいもの、例えば絵画・彫刻・建築等々はその生活に同化し、それぞれに専門家が出て、一層人びとの身近かなものとなっていったのです。一方前の哲学と信仰の二つは人間として、その存在価値を考えるものともなるものであるにもかかわらず、その究極の答えが出にくいものとして、どの時代でも敬遠されてきたといえましょう。

話は大変むずかしくなりましたが、今回の実践を通して、何か具体的に感じとられたことはありませんか——
深井 青竜寺の森妙証尼の話が、その生活体験を通してのものとして、前回にも増して心に残るものでした。

中川 私も尼僧さまの話がとても印象に残っておりますので、知恩院とは違がった感じとして青竜寺にいる間、何か心ながむものがありました。

浅野 こまかいことになりましたが、勤行の仕方を一人づつやったのは大変よかったと思います。在家の私にはとてもたのしいひと時でした。

——それぞれの思いで実践仏教を体験された訳ですが、共に平生とは違った、新鮮な感じを受け、日頃の学園や家庭生活にもよい影響を及ぼしているとのことですが、話を一歩すすめたいと思います。先程もいきました通り、仏教は人びとと共に歩んで来た訳ですが、現代社会にあって仏教がどのような影響を与えているか、女性の眼にはどのたうにうつっているかという点ですが——

中川 この答になるか分りませんが、私は大学受験の際非常に悩み、一時期は死を覚悟したことがありました。しかし兄に悟とされ、仏教に救いを求め、念仏の生活の中に生きることによって、心に落つきが出て、今日までその救いの中に生活してまいりました。

——理解する一つの方法として、仏教に関する講演などを

出席者

社会事業専攻二年 浅野 たえ子

日本史学専攻二年 深井 三代子

国文学専攻三年 中川 りう

司会 編集部

よく聞くとありますが、素直に聞けますか——

深井 内容によりけりですが、むづかしい話になると耳をかさないといえますか、自然拒否することになりますね。しかし女性から見た仏教といわれてもむずかしすぎて、思うように答えられません。

——たしかにそうですね。それでは仏教の教えは、その教義・教旨によっていろいろな宗派にわかれていますが、このことはどのように理解されますか——

深井 それはあっても良いと思います。それぞれの宗祖さまは己れの思うところによって開かれたのですから、いろいろな枝にわかれるのは当然だと思いますね。

中川 私は浄土宗の寺院に生まれ育ちましたので、浄土的な見方になってしまっていますが、実践仏教に参加された方々の中には、たまたま今回は浄土宗の方法で修行したけれども、仏教にふれるという点ではどの宗派の方法でも、それにのぞむ態度ができていれば、そこには充実したものが得られるといっておりましたが、たしかにそうだと思います。

——また仏教は古くさい抹香くさいものであるととられております。一方キリスト教は西洋的なムードをそなえたものとして、若人に受け入れやすくとられておりますが、この点はどうのように考えますか——

浅野 私は最初からそのように感じませんでした。たしかに仏教はむづかしいものですが、それなりに良い面が次々に出てきたものですから。

深井 私は高校時代に教会に通った経験がありますが、そこで得たものと、今の大学での仏教的なものとは、その体得方法は異なっても、心の平和といえますか、何ら変わるものはないと思います。たしかにキリスト教は大別して新旧両教のみです。修入しやすいことは事実です。仏教はあまりにもその教え、修行方法が複雑多岐ですが、その中自分の求めるものを選べば良いと思います。そこに人間形成の充実がはかれると思います。

浅野 キリスト教の場合、その布教の媒体として聖書がありますが、これは西洋的な合理主義がにじみ出ていて、若い人びとに理解されやすいと思います。仏教といえば、私たちは今回のような貴重な体験を得る機会がありました。ない人びとには葬儀とかないかぎり、そうした体験はあり得ないのです。もっと人びとの中にとけ込んでいく必要があると痛感いたします。

——今いろいろとお聞きしてきたのですが、最後に今回のような実践を通して得たものが、今後の生活のささえとなり得るか、役立つことがあるかという点なのですが——

中川 将来的なことはわかりませんが、寺に育ったということから、大変ブラスの面があったと思います。今後もうこうした心持で励みたいと思います。

深井 具体的なことになりますが、今まで親たちにまかせていた墓まいりなどにも、自分からも行こうと思います。要するに今後の生活の心のやすらぎ、ささえを仏教の中に見出し

悲しみをのりこえて

山内 きぬ

(山梨県山梨市在住)

「おばあちゃん、お線香が目にしみて涙がでてくるんだろ、ボクもそうなんだ」

五才になる孫のことばで我にかえったのです。この子と三才になる女の子、二人を残してこの世を去った嫁。古風な私と絶えず言い争った嫁ではありましたが、今こうして墓前に座っておりますと、ただ理由もなく涙が出てくるのみなのです。戦争で主人を亡くして以来、女の手一つで三人の子供の成長を願い、我をも忘れ、ただ夢中で過した戦後の混乱期。そして今、子供たちもなんとか社会人として巣立ち、長男が結婚し、ようやく小さなしあわせをつかんだ矢先、嫁が風邪

ていきたいと思います。

浅野 この度の実践を通して、自分にもこのような真摯なすがたがあったのだということから、ことあるごとに、この様な気持を思い出し、今後の生活の中にかしたいと思っています

——いろいろなありがとうございました——

(文責編集部)

をこじらし肺炎を併発し、二十八才の生涯をとじてしまったのです。

何故私一人がすべての不幸を背負わねばならないのか、愚痴の一つ二つでるのが当然であるかのような心境になったのはいうまでもありません。しかし、この自暴自棄の私の気持ちを救ったのが、二人のけがれもない孫の笑顔でありました。母の死を知っているのか否か分らない、無邪気な孫の素直な心持があったのです。そうだ、この二人の孫のためにも、ここでもう一度がんばらねばならないと、心に決めたのです。そして今、自然と流れ出る涙を、ただ悲しみの涙とはせずいつか流すであります。うれし涙にするために、この二人の孫の平穩な人生を願い、この日の来るまで、老いた身体にムチうってがんばりますと、一人いい聞かせつつ、静かにねむる嫁の墓前をあとにしたのです。



戸川 靈俊 著

『若き日の軌跡』

「何の目的に歩くのでもない。／ 何の方便に歩くのでもない。／ ただ歩きたいからだ、／ ただ歩きたいからだ。／ 渡り鳥のように／ 谷をわたり、高原を、越えるとき／ ふる里への想いが／ (中略) やっぱり苦しみとともにしながら歩いてゆこう。／ 友と楽しみをわかちながら旅を求めてゆこう。」

青春とはまた何とすばらしいものであろうか。あふる熱情、生気にみちた勇猛果敢な行動、やるせない懷疑と苦悩、静かなやさしさと謙虚さ、すべてが青春という時代によって発動されるものであろう。もちろん、これらをただ若さゆえの特権ということだけでかたづけられないが、概して若い日の軌跡にはこのようなことがしるされている。過ぎ去った日々に受けとめた青春、いまこの時に、「これだな」とひ

そやかに感ずる青春、いまだ来たらざる時に向けてひたすらに予感し期待をこめる青春。いずれにしても人の歩み行く道のりの測りしれない多様さのなかで、青春時代ほど感動にみちた日々はなからう。

さて、冒頭にかかげた引用は、今度刊行された随筆集『若き日の軌跡』のなか、「游々たる白雲」という詩の一節である。『若き日の軌跡』——本書の著者は戸川靈俊氏である。

すでにご存知の方も多々あられると思われるが、戸川氏は浄土宗京都黒谷西住院の住職であり、また大阪工業大学教授として哲学や宗教学の教鞭をとりながら、青年教育にたゆまぬ尽力を致されている人である。本書は、その氏が青春のよろこびとかなしみについて折りにふれてものされた随想や詩文、感想文等をまとめられたものである。

しかしながら、本書は単なる青春の日の随想の集まりでは

ない。もとより、著者戸川氏のすぐれた英知と深い思索の跡がいたるところに散見され、ひとつの青春の軌跡を鮮明に印象づけているのではあるが、それにもまして、本書の一層の特色は、著者が大学の庭で話しかけ、語り合った数多くの青年達のことを慈悲の想いをこめてやさしく書きしるしている点にあらう。その意味で本書は、戸川教授と学生達とがお互いに思い悩み、感激をともし合った末に生まれたものなのである。いわば、著者の穏やかな思慮深い人格と、青年達の生きることへのひたすらな求道心とが、青春という尊厳さを心の奥深くかみしめながら、本書を作り上げたといつてよからう。

本書の内容の構成は、「想いをこめて」・「草萌ゆる」・「草蘆寸言」という三つの部分に総題された三十九編の文章から成っており、加えてフアンゲネツプの『民俗』の抄訳が終りに付されている。これは、「——山を行き、里を歩むとき、そこで語られ、そこに今なお残る民俗資料を探ることもワンダーフォーゲルのもう一つの使命——」そうした気持からワンゲル部の諸君と一緒に読んだ名著を、青春の日の記念に載せたということである。確かに、ひとつひとつの随想を読み進んだ最後に、この翻訳を読むと、著者の青春時代のすばらしい彷徨が、また青春を心とする人のまごころが、私達読者の

胸に、ある種の懐しさを帯びてわき起る。このことはすでに著者自身が、「読みかえてみると……走馬灯のように私の眼蓋に浮んできます」と、「あとがき」に述べているが、読者の心にもこうした味わい深い感動を呼び起すのは、ひとえに本書の質の高さのゆえであらう。なかでも、「師の終焉の譜」という一編などは、涙あふるる情感におそわれるほどに麗わしい一文である。

私達は本書においてまたひとつの青春に出会った。ひとりの人のたゆまない若い精神が、青春の言葉と価値とを私達の心に刻んでくれた。若い日のいちずな純粹さと明朗さが本書にはしるされている。「早春に寄せて」と題された一文は、次のようにむすばれている。

「時は早春、そして人生の春未だ浅く、萌えやらぬ早春の時代の諸君こそ、一切の可能性をはらむ望みである。」文章の隅々に渡って著者の知性と教養が伝えられて、穏やかな文体とともによく練り上げられた読みごたえのある随筆集が構成されている。若い人ならずとも是非一読をおすすめしたい好個の一書である。

発行所

B6版二一三頁価八〇〇円
京都市東山区三条通白川橋東五
初音書房



異僧眞覺

第十一回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

振り向いた妙春は一足一足引き返して来ると疑わしげに尋ねた。

「では何処へ？」

彼はやはり答えられない。

「貴方のお部屋に灯が入ったのは此の処ずうっと九つ(〇時)を過ぎていたではありませんか。一晚中灯りのつかないこともありました。若しかしたら油が切れたのではないかと、貴方の留守の間にのぞいた事もあります。はしたない事ですがそうせずにはいられなかったのです。でもそうではありませんでした。やっぱり何処かへ行っていたのです。そうでなければどこかで人に言えないような事をしていたに違いありません。そして夜中

か朝か知りませんが足音をしのばせて帰って来ては女の人に恋文でも書いていたのでしょうか。いいえ、そうです。そうに決っています」

妙春は己が言葉に自分自身の気持をたかぶらせたが、その言葉にははつきりと女の嫉妬が込められていた。不意に顔を覆うと、彼に向けた背が激しく波打った。

二重の戸惑いに彼は混乱した。もうどうしようもなかった。

「ちょっと待て」

そう言うとき部屋の戸袋に手を突っこみ、二三十枚もあるうか、紙の束をバサリと彼女の前に投げ出すように置いた。それは稚拙な白描ではあるが紛れも無い妙春の裸



=元京都・五条若宮・大運寺の門=

身である。一瞥した妙春は居たたまれず部屋に駆けこむと激しい音をたてて障子を閉めた。そのまま日が暮れても物音一つ立てなかった。

だが翌る朝の妙春の表情は彼の予想を裏切って意外に明るかった。明るいというより、むしろ嬉し気でさえあった。

「判りましたわ真覚さん。貴方は私が邪推していたように何処かへ行っていたのではなくて、一生懸命私を想って私の姿を描いて下さったのですね。私は本当に倖せです。それにしても、どうして私の躰をあんなによく知っているのですか？」

そこまで言った時妙春は、

「アッ！」

と声を挙げた。そして気ぜわしく、

「真覚さん。若しかしたら。若しかしたら貴方は……」
彼は腹を据えて答えた。

「そうだ。その通りだ妙春さん。恥かしいことだが俺は湯上りの貴方をすっかり見てしまったのだ」

一部始終を聞き乍ら妙春は頬を真っ赤にした。その朱の色はみるみる項に拡がっていった。上気したまま妙春は言った。

「貴方が毎日お風呂を済ませると、掻き消すように居なくなってしまうものだから、私せつなくて仕方がなかったのです。それ迄は何とも思いませんでしたが、貴方が居ない夜初めて淋しさと云うのか懇しさというのか解りませんが、兎に角たまらなくなつて色々あらぬ事を想像してはくやしがつていたのです。そつと貴方の名を呼んでみたりしました」

「そうだ。私も一度聴いた」

「ではやっぱり本堂の椽の何処かにいたのですね。ああ恥かしい！でもよろしいわ。貴方に見られたのなら。私の姿をあんなに描いて下さつて、貴方の気持ちが解るように思いますわ。私貴方の為なら何でも致します」

暫く思案していた妙春は、

「ねえ真覚さん。本当はもつと私を描いて欲しいのです。もつと明るい処で。そうだ。和尚さんの居ない時、お部屋の中で。本堂にローソクの使い残りが沢山あるでしょう、あれをつけて、うんと明るくして、私の隅々まで描いて欲しい。描いて頂けますか？」

真覚は意外な彼女の申し出にたじろいだ。

（妙春は一体何を考えているのか？）

空恐ろしいものが感ぜられた。

一向山 河島雅言翁遺稿
廿五世

四六版三十八頁

問い合わせ先

静岡県裾野市下和田

沢田 学 遵

「お厭ですか」

「描くよ。描くよ」

彼は慌てて言った。

「でも、そんな事は若しかしたら邪淫戒とかに触れるのではないのでしょうか？これは法兄としての真覚さんに教えて貰わねば私には判りません。」

彼は考えこんだ。

——女の裸、而も尼僧の裸を見、これを描くことは邪淫戒を犯すことはなるのだろうか？そのことは邪淫そのものではないが、戒を犯す強い動機にはなりそうである。それならば当然これは避けねばならぬ——。

と彼は考えた。然しその心下から、

——いや、戒を犯しさえしなければよいのだ。自分を制

する心さえ強ければ、女の裸を描いても、その事自体は戒を犯すことにはならぬ——。

——こんな機会が又とあらうか、逃してはならぬ——。

と、もう一つの心が叫んだ。それは彼にひそむ絵師の心であるか？ はた又、將に戒を犯さんとする破戒僧の心であるのか？

「たとえ裸にしるその姿を写すだけならば邪淫戒を犯すことにはならぬだろう」

多少うしろめいたものを感じつつ彼は答えた。

「ああよかった」

と大袈裟に悦んだ妙春の表情に、彼の心の動きを見すかしている狡さがチラと走った。

火事の日から三年。漸く寺の復旧をなし遂げた大竜和尚は、依頼されるままに遠近の寺々に説教に出掛けた。三日四日と寺を空けることもしばしばであった。或る種の恋情と、言わず語らず共犯者の意才に結ばれた二人は、機ある毎に灯を明か明かとして対峙した。真覚はもう、かつてのように白い幻影に悩まされること無く、存分に彼女の裸形を眼で甜め廻しては筆を運んだ。白い牀は羞らいと興奮をその色に顯わし、ゆらめく灯の色がそれを更に妖しいものに染め上げていた。

彼ははっと筆を止めた。閃光に似たものが彼の脳裏をかすめたのである。じいっと眼を閉じてそれを掴もうとして動かぬ真覚に、しびれを切らした妙春が声をかけた。

「どうしたのです。不意に眼をつむってしまつて。もう小半刻もそうしていなさるわ」

「何か解らぬ……いやちよつと待て……ふーむ」
言葉にならぬ独り言を洩らしていた真覚は、

「そうだ そうだ。観音様だ！」

と大きな声を出した。

キョトンとしている妙春に、

「その座布団を七八枚重ねて、そこに腰かけてくれ。右の膝を曲げて、もっと脚を開いて、もっと」

憑かれたような目指して指図する真覚に、彼女は恐る恐る膝を開いた。

「もっとだ」

彼女は全身の血が逆流した。

彼は腕と手の恰好を次々に指示しては筆を走らせたが遂いに、

「もう画けぬ」

と筆を投げた。

道

小松谷への道

高橋良和

えて、四十八間の精舎を建て、一間に一つ
つ、四十八の灯籠を掛けられければ……
とあるから、浄土信仰に徹した人であっ
て、その臨終のときにも、法然上人を迎え
て、善智識としている。重盛はこの地でひた
すら念仏したのであて、今様に

心の闇の暗きをば灯火の火こそ照らすなれ、弥陀の誓をた
のむ身は、照らさぬところなかりけり、

というたをうたつて、日々念仏行道したといわれている。然し悲しいかな、この重盛も、平家一門の没落ととも
に、この邸宅は後に九条兼実の山荘となったのである。

九条兼実も法然上人に帰依したので、兼実が日輪殿を建て
たときに、法然上人のために堂宇を建て、東山々麗の吉水の
禪房から法然上人を迎えてしばしばここで法談をした旧跡で
もある。

附近には清水の滝山寺という、阿弥陀堂があり、それにつ
づいてこの小松谷があるので、おそらく法然上人は、東山づ
たいに、この阿弥陀堂から小松谷にしばしばきていると思
う。

珍しいことがある。法然上人には持病があつて、それは
「おこり」というマラリヤの一種である。文久二年（一二〇

『京都には七野』といって野のつく地名が七つある。その一つ
に鳥辺野というのがあるが、今の東山五条、西大谷のあたり
で、鳥辺山と称している。昔はこの地は風葬のあったところ
で、化野（あだしの）蓮台野（れんだいの）などとともに見
られている。その鳥辺野の南に小松谷正林寺がある。詳しい
地名は、京都市東山区渋谷通り東大路東入三丁目上馬町とい
うところである。この正林寺に東大路の渋谷で市電をおり
て、東へ約三百米ほどいったところであるが、その道の南側
に、立派な山門がある。

円光大師旧跡という石柱が目につく。この正林寺は、平重
盛の邸宅であつて、今は平家ブームをまきおこしている、N
HKの新平家物語に登場してくる平重盛の邸宅のあとであ
る。重盛はこの小松谷の近くに灯籠堂をつくつてゐる。平家
物語のなかに、

当事の浮沈を歎いて、東山の麗に、六八弘誓の願になぞら

五)に法然上人はここでその持病のおこりにかかっている。

そのとき、兼実の命をうけた聖覚法印がここで、説法をして、その持病の退散を祈っている。九条兼実と法然上人の出会い、兼実の日記玉葉をみるとわかるので、文治五年(一一八九)八月一日に、

今も法然房の聖人を請じ、法文語及往生業を読む。

とあり、その次は八日に、

法然聖人來りて授戒、その後念仏を始む

とある。このころに兼実も出世して、摂政になつているから、飛ぶ鳥もおとす勢であつたことがわかる。

法然上人は、小松谷が非常に気に入つたらしいので、この地を自分の最後の場所と考えたらしく、四国に流罪に出発する際も、ここから出発をしたので、その一夜を兼実とともに、ここで明かしたとつたえられている。

その場所を法性寺の小御堂というが、おそらくこの境内にあつたものと思われる。今は東山区本町十六丁目に法性寺という寺が残っている。その別れのときに、

ふりすてて、ゆくはわかれのはしなれど、ふみわたすべきことおしぞおもう。

と兼実が詠じたに対して、法然上人は露の身はこゝかしこにてきえぬとも、

心は同じ花のうてなぞ

と返歌があつたとつたえる。小松谷正林寺の境内は広い。庫裡につづいて御影堂がある。寺内で保育園を經營しているので、昔の姿と多少ふんいきが異なるが、御影堂には、法然上人の御影と、兼実と、浄土宗の二祖の鎮西聖光の御影が安置されている。

正林寺は、応仁の乱の兵火にかかり、全焼したが、正徳年間(一七一十一—一七一五)に、義山の弟子の惠驚が復興している。

ありがたいのは、法然上人の御影で、法然上人が流罪をうけて四国に赴いたとき、勅免をうけて帰洛の際、讃岐においてつくられたところの自作の像である。それがまわりまわつてこの寺の本尊となつたのである。

元久三年(一二〇六)に吉水の禪房からこの地に來た法然上人が、ここで明月をみて詠んだうたに、

小松とはたれがいしけんおぼつかな、雲をさゝふるたかまつの木

というのが四巻伝にある。たかまつの木はたかまつ枝ともいわれているが、古來たかまつは、四国の高松で、流罪の際の和歌である、ともいわれるが、年代からみて東山の小松谷のことであるとの説もある。



聖典解説

浄土宗の陀羅尼(だらに)八一

大正大学・梵文学教授 真野竜海

真言宗という御宗旨では、その名のとおりに、いろいろの真言を用い、それがたいせつな信仰を表わし、悟りに導かれるものとして尊ばれております。真言というのは、一定の

有難い意義のある言葉といういみで、その中でも、比較的、長いのを陀羅尼といい、短いのを真言と呼び、一字で、仏などを示すものを種子(しゅじ)というように、ふつう分けられます。しかし、陀羅尼と真言との区別は、はつきりと長短では定めにくく、むしろ陀羅尼は、短いのも、その中には、第一に、帰敬の言葉「南無……(帰命……)」があり、次に本文、最後に、結語として、福を祈

る意味かも知れる「娑婆訶(ソワカ)」などの三部からなるのが特色だとされています。陀羅尼の意味は總持といって、心中に仏法を持つものといえます。

このような、いわば、わかりやすいというとお呪いの文のような神秘的な言葉を称える事によつて、神仏のお加護を頂こうという人々の望みは、かなり古くから、インドでは行われていたのです。その中には、神への祈りはもちろん、悪魔を払うもの、他人を呪うもの、自分や人々の幸を願うものなど、多くありました。しかし、仏教では、ただ、呪いを称えるだけで、自らの心も努力と無関係に、

安逸を求めたり、人を呪ったりして悪く用いられることを厳しく注意し否定しました。

仏教では、自分の真剣な仏への願を、口に現わす時、はじめて、それは、真言であり、陀羅尼であるわけです。この意味の上に立つ陀羅尼は、陀羅尼自体ふしぎな力を発揮します。逆に、人の願を強くし、人の心に精神集中の機会を与え、信仰を深めて行きます。単なる災難除けの「おまじない」などとは、性格の異つたものです。

これは言葉です。称えるものです。意味を理解して頭で考えるのを目的とするものではありません。ひたすらに、称えることに意義

〔阿弥陀如来根本陀羅尼〕

ノーマーアラタンノートラヤーヤ namo ratna-trayāya	ノーマクアリヤミタバヤー nama āryāmitāhāya	タタガ tathaga
帰命す	三宝に	帰命す 聖無量光 如来
タヤーラカテー tāyār̥hate	サミヤクサンボダヤー samyaksambuddhāya	タニヤター tadyathā
オン om	アミリテー amrte	
応供	等 正 覚者に、	所謂 唵、 甘露よ、
アミリトートバペー amrtōdbhave	アミリターサンバペー amrtasambhave	アミリタギャルペー amrta-garbhe
アミリ amr		
甘露を発生するものよ	甘露 源 よ	甘露 蔵 よ、 甘
ターシッデー ta-siddhe	アミリターテーセー amrta-teje	アミリタ ビキャランデー amrta-vikrānte
アミリ amr		
露 成就よ、	甘露威光よ、	甘露 勇猛よ、 甘露
ターキャランダーギャミイネー ta-vikrāntagāmint	アミリターギャギャノー amrta-gagana-	キチィキャレー krtikare
勇猛 行者よ、	甘露 虚空	作用者よ、
アミリタードンドビ amrta- dumdubhi-	ソバレー svare	サルバーアラターサダネー sarvār̥tha-sādhave
サルバー sarva-		
甘露 鼓 音	声よ、	一切の目的を達成するものよ、 一切の
キアルマー karma-	キレーシャ kleśa-	ギイシャヨ ksayam-
キャレー kare	ソワカー svāha	
業と	煩悩とを 尽すものよ、	スパーハ。

があります。したがって、中国や、日本の言葉に、インドの仏教の陀羅尼の文章を翻訳する場合も、意味の訳をしないで、インドの言語のままに、漢字を当てて訳をしました。つまり、漢音訳といいますが、例えば、インドの「ナモ」は帰命の意味ですが、そうしないで、「南無（なむ）」と音訳したのです。御念仏の「南無阿弥陀仏」も、これに当たる梵語文の原典そのものは見つかっておりませんが、やはり一種の真言といふべきで、意識すると帰命「無量覚者」となるべきなのに、そうしないで、「南無阿弥陀仏」と称えることは、より深く、有難い意味を見るからだといえます。

☆ ☆ ☆

法然上人は、比叡山に、学ばれましたが、ここは、単に天台宗というだけでなく、仏教のメッカとして、禪、真言、天台、戒、浄土という各種の学門学説が研究、伝持されておりましたから、当然、浄土宗の中にも、大なり、小なり、それらの要素が引きつがれているわけです。浄土宗の中で、使われている真言、陀羅尼を、少し、御紹介したいと思いま

す。訳をしないで用いることに意味がありません。すけれど、意味を知ることによって、さらに、その陀羅尼が有難いものとなりましょう

☆ ☆ ☆

はじめに、いちばん長い阿弥陀如来根本陀羅尼について説明します。くわしくいいますと、今使われているのは、唐不空(七二〇年来唐、七七四年歿)訳の『無量寿如来観行供養儀軌』の「無量寿如来根本陀羅尼」(大正藏經・十九・七一b)というもので、真言は

もとより、天台、浄土の各宗で用いられており、阿弥陀仏の徳を讃え「往生浄土」の功德があるとして尊ばれております。第一段に、今、お経として、読まれている漢音訳文の読みを、第二段に、その梵語のローマ文字、第三段に、荻原博士の和訳文が書かれております。第二段の読みと、第一段とは、言葉の続きぐあいなどで、異った所があります。

☆ ☆ ☆

この陀羅尼は、まず第一に、三宝、及び、無量光、つまり阿弥陀如来に帰命を捧げている。次に第二に、本文として、阿弥陀如来の御徳を讃え、徳力を示す十の甘露を冠する呼

名と、二つの働きを示す呼名によって呼びかける。第三に結びの語、「ソワカー」で終わっていて、いわゆる陀羅尼の形をなしております。まず三宝で、広く仏教を示し、次に、阿弥陀如来、浄土の門に帰依します。このような帰敬文は、とくに、後代の仏典、論書の冒頭にはかならずといってよい程付け加えられてから、本文に入ることになっていきます。

☆ ☆ ☆

本文の甘露が十出てくるので、この陀羅尼は十甘露呪とも言われるが、甘露とは、どういう意味でしょうか。陀羅尼の言葉は、アミリタ、梵語は、アムリタとなっていて、それは、不死とも、不死の霊用ありという神酒のソーマ酒とも考えられる。また、阿弥陀如来の阿弥陀は、原語は、無量を意味するアミタ(amita)で、あろうといわれるが、この甘露、不死を示すアムリタ(amrita)も、俗語では、アミタ(amita)となるため、両者は言葉の源語は異なっていて、しかも、同じアミタという形をとることが考えられ、意味も、無量と不死とで似ている。そのため、不死なる甘露酒にも比すべき阿弥陀如来を讃えるた

めに、阿弥陀とし語呂も合せ、甘露々と阿弥陀如来を呼びかけたものであろう。したがって、この甘露は、甘露にも譬うべき方、つまり、阿弥陀如来と同義語と考えてよいのです。その阿弥陀を、十種に讃えているが、第六以下は、天体の、太陽、虚空、雷鳴などの大威力あるものに譬えているようである。威光とは、太陽の熱と光、勇猛、勇猛行者、虚空作用者とは、太陽の運行であり、鼓音声とは、雷鳴である。それぞれ太陽にも比すべき阿弥陀よ、雷鳴にも比すべき阿弥陀よ、として、阿弥陀如来の御徳を讃えるのであります。

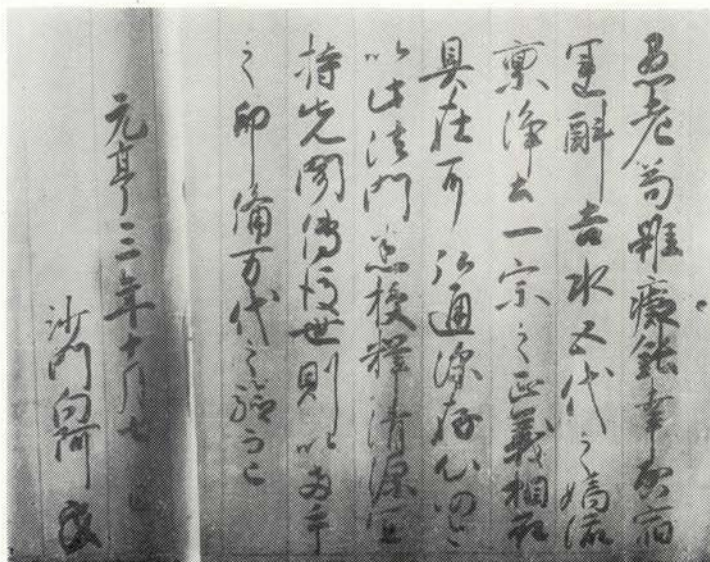
☆ ☆ ☆

最後の「スパーハ」は、陀羅尼の末尾に付けられる言葉で、「そわカー」と読まれ、「善説」の意とされております。

法要、とくに、おさがきや、棚経には、かならず、この陀羅尼が誦せられます。信者の方ならきつと、このふしぎなリズムをもつ魅力的なお経を耳にされた事があるはずで

(続)

浄土宗列祖の墨蹟をたずねて



向阿は是心とも浄花房証寛ともいう。武門の出身であったが、三井の園城寺で剃度した洛西花開院に居、後浄華院を創した。礼阿に浄土法門を学び、学僧としてもまた三部仮名抄のようにその文才もすばらしいものである中でも帰命本願鈔は代表的著作であり、写真集要決の奥書で弟子に授けたものである。晩年は双岡の西光庵に住した。浄土教の朝廷との接点を考える時、忘れてはならない人物である。いかにも学僧といえる運筆ではなからうか。

(田中祥雄)

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
(送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円
(送料 不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十七年十月二十五日印刷
昭和四十七年十一月一日発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

“御年始のご挨拶がわりにご利用を”

『浄土宝暦』

- ・一部 25円 (200部以上より 単価23円)
- ・送料実費 B6版 40頁

《前田聰瑞・大野法道・中村弁康編》 本会発行

三 碩 学 『浄土宗読本』 覆 刻 版
の 名 著

価 1000 円 千 150 円

時代を越えて浄土宗の真髄を平易に説いた不朽の入門書を浄土開宗八百年を期して世に贈る。浄土信仰の意味と価値・法然上人の念仏の教えを日常生活に実現する仕方・仏教徒としての心得等々。この一冊あれば浄土宗は勿論仏教のすべてがよくわかる無類の名著。

佐藤治子 著

新 刊 『旅 日 記』

アメリカ・シルクロード・インド篇

本誌で掲載した世界旅行の随篇を一冊の本にまとめてみました。
「平凡な主婦の平凡な世界旅行」として気軽にお読みいただければ幸いです

四六版 320 頁 単価 1,500 円 (千 140円)

発行所 山喜房仏書林

御用のむきは本会までお申込み下さい。